

問五 傍線部2「アフリカ美術の取り扱い方」とあるが、筆者によれば「ジェームズ・クリフォード」は「アフリカ美術」の近代における動向をどのように捉えているか。それを表す二十文字以上四十文字以内の箇所を抜き出し、冒頭と末尾の二字をそれぞれ記せ。

|  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

- イ 一九八四年にサイドが企画した展覧会に対し、クリフォードはそこに見出される日本人像が、西洋の歪んだ自己認識から生み出されたものであることを指摘した。
- ロ クリフォードは、西洋がアフリカ文化を自分勝手な仕方では捉えているばかりか、そうした西洋中心主義的な自らのありように無自覚でもあることを厳しく批判した。
- ハ グリフォードによれば、ピカソなどの「モダンアート」とアフリカの「部族美術」に親縁性があるのは、アフリカ文化が先進国である西洋の文化を模倣してきたからである。
- ニ 「オリエンタリズム」をめぐるサイドの議論によれば、西洋は非西洋を遅れたものと見なしつつも、つねに「エキゾティク」なものとして神秘化し、崇敬の対象としてきた。
- ホ 西洋は自文化を進歩し続ける歴史的なものと捉えつつ、アフリカ文化を静止した非歴史的なものとして保護するという形で抑圧している、とクリフォードは主張した。

|  |  |  |
|--|--|--|
|  |  |  |
|--|--|--|

## 私と世界

### 第十二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① ひどく個人的な経験からはじめたい。六〇年代後半は、この国のいわゆる高度成長期である。私は、京浜工業地帯に隣接する、海と山に囲まれたちいさな町に住む小学生だった。ときおりはおとなに手をひかれ、東京にでかけたものだ。住んでいたのは街ともいえない街である。田園風景がむしろ身づくろいであった。終点に近づくにつれ、車窓をながれてゆく景色が典型的な工業都市の光景へと変わってゆく。河ぞいに工場が建ちならび、煙突からは煙がたなびき、空はどんより煤けている。

② この国は、絶え間なく成長してゆく。おとなたちはそう語り、私もたぶんそう信じていた。すくなくとも、街がマタタク間に（と、子どもにはおもわれた）変わっていったのはたしかである。都下の親戚の家にいくと、いつのまにか近所からはトロリーバスが消え、やがて路面電車のすがたも見えなくなる。なにより、電車から見える風景が変貌した。工業地帯は、子どもの目にもあきらかにA 密集し、また絶えず拡大してゆくかに見えた。

B 感じた悲しみは、やはりそれなりのものであったにちがいない。つまり、子どもなりの感情だつたに相違ない。だが、悲哀を感じたという事実には、おそらく記憶がいはないような気がする。路面電車がハイシされ、田圃が消えてゆくこと自体が哀しかっただけではない。工業地帯の付まいそのものが、どこかもの悲しかったのである。

【出典】

熊野純彦

『レヴィナス入門』

【著者出題歴】

- ・ お茶の水女子大学
- ・ 静岡大学
- ・ 広島大学
- ・ 法政大学
- ・ 早稲田大学
- ・ 関西学院大学
- ・ 近畿大学
- ・ 西南学院大学

④ そのときの感情そのままを、いまことばによって再現することはできない。かたちのさだかでないおもいは、いかしやがて沈殿し、不思議と忘れない記憶の一部となった。

⑤ 個別的な〈もの〉は、ある面で工業都市に似ている。工業都市にあつては、いつさ  
いが生産という目的のために適合させられている一方で、工業都市は煙にみち、屑と  
悲しみとにあふれて孤立しているのだ。〈もの〉にとつての裸形とは、その〈もの〉の  
存在が目的にたいして有する余剰のことなのである。

⑥ いっけん謎めいたこんな文章を、レヴィナスのテキストに発見したのは、それから四半  
世紀以上経つてからのことであつた。レヴィナスの第一の名著といわれる『全体性と無限』  
(一九六二年刊)の一節である。

⑦ かつて感じた奇妙に割りきれない感情に、ことは与えられているようにおもわれた。  
そのときまた、レヴィナスについてなにごとかを理解しえたと信じたものである。テクス  
トとの出会いは、ときにそんなかたちで、ふいに訪れることがある。

⑧ 車窓をながれてゆく街は、あまりに裸形であつたのだ。寒々しい光景が、子どもにすら  
悲しみをおぼえさせたのである。それは、当時 C 論じられはじめ、子どもの耳にもと  
どいていた、いわゆる「公害」の問題とは D 関係がない。裸形の風景がよびおこす  
感情は、ひとが世界のうちで生きてゆくこと自体の悲しみと、どこかでふかく通じあつて

第十二問

3

いたようにおもわれる。裸形の風景は、〈私〉を拒んでいる。世界は私とは無縁に、私の存  
在などすこしも必要とせず、煙を吐き出し、廃棄物を堆積させてゆく。——なぜ「通じあつ  
て」いたのか。もうすこしことを補つておかなければならぬだろう。個人的な経験に  
いまいちど立ちもどりたい。

⑨ 慣れ親しんだ風景が消えてゆく。失われたもののみが、むしろ慕わしく美しく感じられ  
る。あらたに目のまえにひろがる光景に、どこか馴染んでゆくことができない。じぶんを  
包みこみはじめた景色が、どうしても 異郷 のようにおもわれてならないのだ。

⑩ こうしたおもいはたぶんありふれたものであろう。子どものころ、だれでも感じたもの  
だろう。そうであるなら、いっけん逆説的なことだが、子どももまた ノスタルジーと エキ  
ゾティズムとに無縁ではない。ただしエキゾティズムといつても、異文化への憧憬ではな  
い。ここでの エキゾティズムとはにより、いま在る目のまえの世界を異郷ととらえる  
感覚である。その意味での エキゾティズムは、やがてノスタルジーのむしろの背面となる。

⑪ 世界それ自体がエキゾティック(異邦的)であり、世界そのものが異郷であるかぎり、  
私には身のおきどころがない。ノスタルジーは募るばかりである。しかもゆえなきノスタ  
ルジーが募るばかりである。ノスタルジーは、ここではむしろ、けつして与えられなかつ  
たもの、あらかじめ失われているものへの郷愁であるからである。——ランボーがうたう  
ように、世界には「真の生が欠けている」。だが、その詩句を引きながらレヴィナスがいう  
とおり、「にもかかわらず、われわれは世界内に存在している」(『全体性と無限』)。

12 過ぎたもののみが美しくおもわれるのは、過去が、あたえられた世界からすでに距離をもっているからだ。だから、ことは子どもがときに感じる感覚という域をおそらくは越えている。たとえば芸術がなりたつのは一般に、世界からのこの距たりのゆえである。芸術は、あたえられた世界をひとつの「異郷」として手わたす。しかも、世界をその「裸形」において、その異邦性をあらわにしつつ手わたすのである。ロダンの彫刻にみとめられる荒々しい塊の存在感、セザンヌの絵画における剥き出しの形態、「色と線との純然たる。タフムレ」、あるいは「存在の」フクラミの表現、それらがあらわしているものは、物質があるということ、世界が存在するということそのものだ(『存在することから存在するものへ』一九四七年刊)。戦後まもなく発表された作品のなかでレヴィナスは、文脈のあいまを縫うようにして、そんなことを書きとめている。ここで強いて単純に言えば、問題となっているのは、世界が私とはなんのかわりもなく、たんに存在するということである。

③ 芸術は、その意味でおしなべて「異邦的(エキゾティック)」であり、異郷としての世界をこそあらわにするものである。芸術によって開示された世界のまえて感じられるものは、この世界そのものが異邦であることにほかならない。

(注) ○レヴィナス……ユダヤ系のフランスの哲学者(一九〇六―一九九五)。  
○ランボー……フランスの詩人(一八五四―一八九一)。

65

60

55

問一 傍線部a～dのカタカナを漢字に改めよ。

|                      |                      |                      |                      |
|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| a                    | b                    | c                    | d                    |
| <input type="text"/> | <input type="text"/> | <input type="text"/> | <input type="text"/> |

問二 空欄A～Dに入れるのに最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし同じものを二度用いてはいけない。

|                      |                      |                      |                      |
|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| イD                   | ロB                   | ハC                   | ニA                   |
| とりあえず                | ばくぜんと                | かまびすしく               | とめどなく                |
| A                    | B                    | C                    | D                    |
| <input type="text"/> | <input type="text"/> | <input type="text"/> | <input type="text"/> |

問三 傍線部1「電車から見える風景が変貌した」とあるが、「変貌」する「電車から見える風景」を端的に言い換えた五字以内の語句を、本文中から抜き出して記せ。

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |

問四 傍線部2について「エキゾティズム」が「ノスタルジ」の「背面となる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 目の前の世界をなじんでゆくことのできない異郷のように感じるとき、失われた世界への慕わしさを感じる。
- ロ 慣れ親しんだ目の前の世界が異郷と感じられたとき、異郷と化した世界そのものが慕わしいもののように感じられる。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

『断つこと、放つこと』

- ・大阪大学
- ・鳥根大学
- ・都留文科大學
- ・學習院大學
- ・上智大學
- ・日本大學
- ・早稻田大學
- ・近畿大學

15

問五 傍線部③「世界をその裸形において、その異邦性をあらわにしつつ手わたす」とはどのようなことか。本文に即して、五十字以内で説明せよ。

イイ筆者はレヴィナスに導かれて、ロダンの彫刻やセザンヌの絵画に接することができた。

工業地帯の風景が公害に汚染されていくのを見たため筆者は深い悲しみを覚えた。

ハ 筆者は個人的な体験を通してレヴィナスの文章を理解しえたと思った。

ニ 筆者が工業地帯に感じた個人的感情は、他の地域に住む人々と共有できないものだ。

ホ 筆者は田園風景を好んでいたため、工業地帯の風景になじめなかった。